

威儀を正した<sup>たたず</sup>佇まいは神に捧げられた御文庫にふさわしい印象といえよう。

住吉大社は古く歌神とされ、『伊勢物語』や『源氏物語』など王朝文学にも数多く登場する文学の神としても信仰された。その背景のもと、江戸時代の大坂・京都・江戸の書肆（書籍商）二十人が発起人となり、享保8年（1723）9月に御文庫の<sup>ほつがん</sup>発願建立となった。その後、住吉御文庫講（御文庫を中心にした書籍商仲間の崇敬集団）が結成され、<sup>ぼくしょ</sup>図書<sup>むしぼし</sup>の奉納、曝書（蔵書の虫干）、目録の作成などを行うようになった。

一方、享保15年（1730）大阪天満宮にも天満御文庫講が結成され、御文庫の建立となった。以後、住吉と天満の両御文庫は、大阪出版業界を象徴する存在として崇められた。

明治7年（1874）、大阪の出版界を代表する古書肆、鹿田静七（鹿田松雲堂）・赤志忠七（忠雅堂）・松田正助らが中心となり、御文庫講が再結成され、献本や講行事の活動が活発化した。明治43年（1910）には、住吉御文庫講と天満御文庫講は合併し、「大阪書林御文庫講」と改称した。以後、御文庫講の有志は、一年ごとに住吉大社と大阪天満宮を参拝し、御文庫の献本を交互に行うようになったのである。出版に際して<sup>はつずりほん</sup>初摺本（初版本）を神前に奉納し、その加護を祈願することを<sup>ならわし</sup>慣習としてきたが、この伝統は現代に至るまで連綿と受け継がれている。

なお、天満御文庫は天保8年（1837）大塩平八郎の乱の兵火にかかり、書物の大半が焼失してしまったが、住吉御文庫は創建当初の書物を収蔵していることにも注目され、その建立時期から「大阪最古の図書館」とも表現される。

収蔵される図書中には、数々の珍本・希書が含まれている。その例を挙げるとキリが

ないが、『八雲抄』『俊頼髓脳』などの稀少な歌伝書をはじめ、江戸幕府の禁書となった大塩平八郎著『洗心洞笥記』、川田維鶴（坂本竜馬の英語の師）によるジョン万次郎の取調記録『漂異紀略』、大阪の緑化運動の先駆けて<sup>おとものおえまる</sup>大伴大江丸の勸進献詠『松苗集』ほか多数の文献があり、また、明治以後でも、立川文庫の講談本『大阪バック』などの近代大衆文学、教科書・参考書など様々な分野にわたっている。

平成23年（2011）5月、住吉大社御鎮座1800年記念大祭にあわせて全面修復が施され、漆喰の白壁や海鼠壁も美しく甦った。この御文庫もまた現役の蔵であると同時に、大阪の出版文化と住吉信仰を今に伝える貴重な存在といえよう。

御文庫の建立は、信仰の動機だけではなく、本屋を中心にした町人が力を結集させ建立・維持してきたことに意義があるもので、江戸時代から現代までの大阪の出版文化を見守りつづけてきた貴重な生き証人といえよう。



住吉御文庫

#### 《主な参考文献》

- 『住吉大社』学生社
- 『住吉大社史』住吉大社奉賛会
- 『住吉大社歴史的建造物調査報告書』住吉大社奉賛会
- 『住吉大社御文庫目録』清文堂出版
- 『住吉村誌』住吉村常盤会
- 『墨江村誌』大阪市墨江教育会　ほか

# 住吉の成り立ちと蔵の分布

住吉蔵部／阪田晴宏

## はじめに

住吉という名称の由縁は、大神が住むに好い土地という意味で「真住吉<sup>マスミエ</sup>し住吉<sup>スミノエ</sup>の国」と摂津国風土記にある。しかし現在の町の基盤が形成されたのは明治末頃からの開発によるため、ここではその頃からの住吉を概観する。

## 明治末頃の変遷

1889(明治22)年に住吉郡住吉村が成立している。江戸期から明治にかけての住吉村はあまり農耕に適した土地ではなかったために小集落があったのみで、大半は原野や森林であったようだ。住吉村成立当ても400戸程度の寒村であった(住吉区史)。

現在の住吉区に相当する地域を見ると、1889年4月には住吉村、粉浜村、墨江村、<sup>よさみ</sup>依羅村の4か村である。墨江村は長峽町、上住吉、千駄、殿辻、澤之口、浜口、南浜口、

遠里小野が、依羅村は山之内、杉本、杉本新田、庭井、我孫子、苅田、寺岡、前堀が合併して成立したと住吉区史にある。その後、1894(明治27)年に依羅村から、寺岡村と前堀村が分離して長居村になった。そして1896(明治29)年には住吉郡は合併により東成郡となり、1925(大正14)年には大阪市に編入される(図1 住吉区史)。

そういう市制の変遷の中で、この地域の開発を計画的に進めるために活用されたのが1899(明治32)年の「耕地整理法」と1909(明治42)年の改正同法である。耕地整理とは本来農地の整形のために行うのだが、大阪では町の無秩序な拡張を防ぐために耕地整理の名目で住宅地が開発されていった。1919(大正8)年に「旧都市計画法」が制定されたのちは土地区画整理事業が都市計画として位置づけられ、その後は耕地整理事業ではなく土地区画整理事業として都市計画されていく。

## 耕地整理と東成土地建物株式会社

明治末頃、帝塚山を含む住吉村は周辺と比して最も富裕な村だったと「住吉村誌」にある。1912(明治45)年には17名の土地所有者たちが住吉第一耕地整理組合(太田儀兵衛組合長)を組織し、住宅地開発に着手する。その前年には帝塚山で最大の土地所有者であった山田市郎兵衛らが「東成土地建物株式会社」を設立し、耕地整理完了後の住宅地分譲を担ったようである。住吉第一耕地整理の区域は現在の帝塚山中1丁目～3丁目にはほぼ該当する。1925(大正14)年には住吉神一耕地整理(現在の帝塚山中

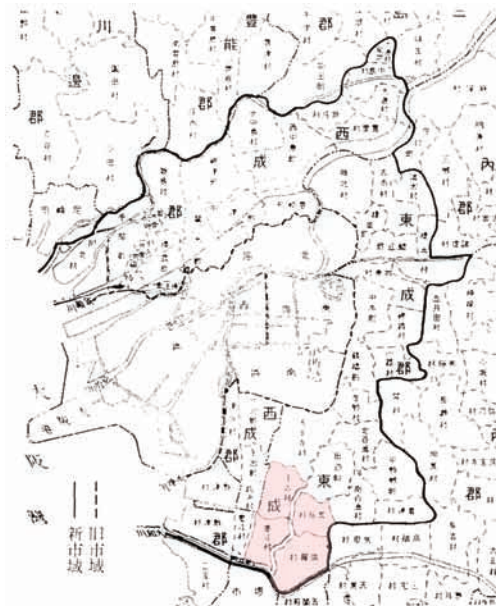


図1 大阪市の第2次市域拡張図 住吉区史より